# 05 競技運営

## Competition Management

# 東京2020スポーツマネージャーレポート

競技運営委員会委員長
鈴木一弘 SUZUKI Kazuhiro

## 1 Competition venue and facilities / equipment

## 競技会場と競技施設・備品について

### 国立競技場における準備の難しさ

これを書いている現在からすれば、遠い昔の記憶に思えるほどの出来事になってしまった東京2020オリンピック（以下、東京2020）であるが、自分の取り組んできた仕事の総まとめとしてレポートを作成している。その中から特にレガシーとなった施設に関することと、競技役員（ＮＴＯ）について述べておこうと思う。

競技会場である国立競技場は、今大会時に限り「オリンピックスタジアム」と呼称することが決められた。これはＩＯＣの習わしなのかと思う。オリンピックスタジアムであるがゆえに、開閉会式に使われるため、陸上競技には不自由なことが多かった。その一番は会場転換であった。

開会式という一大セレモニーのため、２ヵ月以上前から準備が必要ということであった。当初はオリンピック代表選手選考競技会である日本選手権を、リハーサルも兼ねて開催できるものと思っていたが、６月から開会式準備に入るということが言われ、それがかなわず大会が大阪で開催されたのは、このような理由からである。

開会式の仕様になっている会場を陸上競技仕様に転換する作業が必須であり、この作業が終了するまで陸上競技の準備ができないということであった。部屋や施設設備の入れ替えも大変な作業であったが、その中で一番の問題はフィールドの芝生の養生であった。開会式のためにフィールドの芝生は一旦撤去され、遠隔地で養生されていた。それをスタジアムのフィールドに戻して根付かせるのに時間が必要なのだが、かなり切迫した作業を強いられていた。オリンピックの時は開会式から１週間の時間があったのだが、パラリンピックでは３日間しか時間がなく、根付いていない芝に投てき物が落下すれば着地痕跡が定まらなかったり、審判員の足元が不安定になったりと問題が発生していた。

オリンピック16日間、パラリンピック13日間という限られた会期の中で２つの大きなイベントを行うということは、至難の業であると言わざるを得ない。今後はパリのようにスタジアムという建物に限定せず、セレモニーを開催できるスペースという視点で会場が選定されていくことにすべきであろう。実際には女子サッカーの決勝が組み込まれていたので３つあったのであるが、ご存じのように（幸いと言って良いであろう）FIFA（国際サッカー連盟）の決定で横浜の日産スタジアムに移転してしまった。





この女子決勝は、陸上競技の日程と会場転換の関係で午前中に組み込まざるを得ず、陸上競技のイブニングセッションに間に合うように終了させる必要があった。そのために11時キックオフ、14時にはセレモニーまで終了というスケジュールが組まれた。ハンマー投で傷んだ芝を部分交換したことで芝の色目が変わってしまったことや芝の堅さも問題になっていたが、決定的だったのは暑さであった。最高気温が記録される真昼にゲームをさせるわけにはいかないというFIFAの決定で、いとも簡単に競技日程・会場が変更となった。

### サブトラックの設備について

もう一つハードルになっていたのは、公認競技場の条件であった。改築前の国立競技場はサブトラックがなかったが、特別に第１種という位置付けを得ていた。オリンピック・パラリンピックを行うからにはウォームアップ場となるサブトラックの設置は必須であり、第１種の公認競技場でなければＷＡ（世界陸上競技連盟）のClass １の取得ができないという設えであったため、サブトラックは第３種の公認を取得する必要があった。

問題はトラックそのものではなくて、その付帯設備や競技備品であった。明治神宮外苑の軟式野球場に仮設のトラックを設置するという案は、1991年の第３回世界陸上競技選手権と同じであった。当時の規程ではサブトラックが第３種競技場でなければならないということにはなっていなかったかと思う。施設設備で苦労したという話は聞いたことがなかった。今大会では財産処分が発生するのと、施設設備の予算は東京都が負担することになっていたため、話は簡単にいかなかった。

第３種の競技場に必要な設備や備品まで整備するとなれば、億単位の資金が必要となる。ハードルや決勝審判台、走高跳・棒高跳の支柱にマット類、バーや巻き尺、国旗掲揚柱など、通常の競技場の倉庫や建物にある物をそろえる必要があり、さらに大会後はそれらを処分する必要があった。

一方、練習会場（ウォームアップ場）で使うハードルやマット類はＷＡのオフィシャルサプライヤーであるMONDO社から提供を受けられることになっていた。ただし、その時期はテストイベント時であって、2019年の国立競技場竣工時ではなかった。公認検定の時期と設備・備品がそろう時期の違いから、本番・テストイベントなどのスケジュールとの関連で、サブトラックの備品類は2019年の竣工時の検定でそろっている必要性があった。そのため、備品類は東京2020大会組織委員会（以後、組織委員会）で調達することが必須となった。

先に述べた調達と処分の関係で、どうにかならないかを思案していた。まず考えたのはオリンピック・パラリンピック期間にホッケー会場となり、１年間以上、陸上競技に使用できない大井中央海浜公園陸上競技場から借用することであった。高木良郎施設用器具委員長に相談したところ、大井競技場はホッケーの会場になってもその間、公認は継続させるということであった。そのため「いつでも競技を行える状況でなければならない」という条件に反してしまうため、備品類の長期貸し出しはできないということであった。

その代わり、高木委員長からは味の素スタジアム（東京スタジアム）は現在公認を廃止しているので、こちらから借りることはできるのではないか、国体で通常以上に備品類を購入してもらっているので充分な数はあるはずとのアドバイスを受けた。そこで、東京都のオリンピック・パラリンピック準備局を経由してワールドカップラグビーの事務局へ相談し、何とか倉庫に眠っている備品類の借用ができることになった（写真１）。2019年ワールドカップラグビーの会場であったために、倉庫内の大きなマット類や投てきの囲いなどはない方が好都合という理由もあったようである。

公認検定が行われる１ヵ月前の2019年10月、味の素スタジアムの陸上競技備品の借用・移送を実施した。10ｔトラック延べ10台による倉庫内備品の移送をオリンピック・パラリンピックスポンサーであるヤマト運輸の協力で実施し、本競技場と投てき練習場の投てき用囲い２基はニシ・スポーツの協力を得て国立競技場に移設した。

その後、問題になったのは、元々国立競技場に備わっていて本番時に使うことのない競技用備品の保管場所である。大会本

写真１　味の素スタジアム借用品

写真２　MONDO Equipments

番ではMONDO社提供のオリンピック・パラリンピックルックが施された競技用備品（写真２）が使われる。その保管場所は、他ならない国立競技場内の倉庫にせざるを得ない。

国立競技場内には他にも放送中継用の機材や増設電源の機器、OMEGAやATOSの情報処理機器、さらには開閉会式で使用するセレモニー関係の器具類も保管されるため、保管場所の取り合いが起こっていた。組織委員会スタッフや国立競技場職員の協力も得て既存のスペースを整理・圧縮し、さらには駐車場のスペースをも活用してなんとか収まりをつけた。

今回の問題はオリンピック・パラリンピック特有のものと考えられ、世界選手権などの陸上競技単独の競技会では心配無用なものなのかもしれない。しかし、限られた施設設備の有効利用ということを考えた時に議論をしておく必要はあると考える。特に昨今はSDGsの方向性が重視されている。柔軟な考え方で無駄を省き、資源の有効利用をして行くべきであろう。その意味でも味の素スタジアムから借用せずに、MONDO社から提供される器具と国立競技場に備わっている器具があることを前提に、サブトラックを認めていただければ良かったのではないかと考えている。

資源の有効利用という点では、サブトラックに敷設されたMONDOの舗装材の行方が問題であった。先にも述べたが明治神宮外苑の営業補償という観点から早急に原状復帰をしなければならず、トラック舗装材を再利用可能なレベルで丁寧に剥離することができなかった。実際に再敷設可能なレベルで剥離するとなれば１週間以上の期間が必要であると聞いた。また、引き受け手も輸送にかかる費用や再敷設する費用は自己負担になるため、なかなか引き受け手は現れないと予想された。

１レーンの幅の舗装材は15mのロール１本で280kgあるので、４本で60mの走路が作れるが、輸送する重量は１ｔを超える。軽トラックやワンボックスカーで手軽に運べるという代物でもないので、都内の学校に引き取りに来ていただくにも、手続きから輸送そのものにしても相当に手間と費用がかかってしまう。MONDO社も寄贈すると言っていたが引き取り手がないとなると廃棄してほしいと言ってきたため、３日もかからないうちに剥がされて産業廃棄物となってしまった。このような提供品があるのであれば、事前に事後の処理まで考慮して導入をすべきであった。

組織委員会で購入した投てき物（砲丸・円盤・ハンマー・やり・こん棒）は都内の競技場、大学・高校、競技団体に引き取ってもらえたのは幸いであった。実際には引き取りにあたっても大会終了後の混乱の中で行ったため、きちんと引き取り手の中に収まるまでには時間と手間を要していた。

# 2 競技役員の育成

Training of NTO

## NTOの編成と育成の過程

オリンピック・パラリンピックの招致が決まってから、人材こそレガシーであるとの認識で競技役員（ＮＴＯ）の育成をスタートさせた。日本陸上競技界のレガシーとするべく、ＮＴＯは全国から募る必要があったので、各加盟団体から推薦してもらうこととなった。その際に毎年、陸連主催競技会を開催していただいている主管陸協からは、指定人数を配慮すべきであろうという方針が事務局から出された。

このＮＴＯはＷＡのTOECS（競技役員育成認証制度）に位置づけられ、オリンピック・パラリンピックではＩＦ（国際競技連盟）の役員に分類されている。したがって指定されたカリキュラムの講習を受け、試験に合格しないと認定されないものであった。つまり、加盟団体から推薦されても、合格しなければ本番で審判の任に当たれないということである。

オリンピック・パラリンピックのマニュアルでは単にTechnical Official やJudgeという表記ではなく、ＮＴＯという名称で待遇などもマニュアルに明記されていた。このことから過去の世界選手権ではＷＡの指定するTOECSに則ったＮＴＯではなく、日本陸連の公認審判員として競技役員を編成して競技運営にあたっていたが、今回の東京2020では正規のＮＴＯで運営にあたってもらうべきであろうということになった。

東京に来てもらい、講習を受けて試験を実施し、合格者にはその後、実技研修を受けてもらうという３年がかりの育成事業が始まった。この事業は他競技も同様であるが、組織委員会の業務ではなく、ＮＦ（国内競技団体）の任務であるとされた。そのため、本連盟では競技運営委員会が担うこととなり、公認審判員研修Project Teamがその担当として企画立案・運営を担った。

構想をほぼ１年がかりで練り、2017年の11月から講習がスタートした。ＷＡの講師資格を持つ陸連事務局の関幸生国際担当部長（当時）に講師をお願いし、ナショナルトレーニングセンターの研修室で講習がスタートした。全国から200名以上が集められて講習がスタートしたため、研修室の定員から一度に講習が行えず、２部屋で講習を実施せざるを得なかった。そのため、関部長の講習がメインで、私がサブとしてオリンピック・パラリンピックの競技会運営に関する講義を受け持った。

ＮＴＯはTOECSのレベル１に相当するので、自国で国際競技会を開催するために必要な知識・技能を備えているかが問われる。国際的な資格ではあるが、英語で運用しなくても良いということになっていて、講義や試験は日本語で行った。

日本陸連の公認審判員は基本的に各加盟団体や日本学連によって育成されている。国内では各加盟団体・地域陸協でそれなりに本格的な競技運営を行っていることから公認審判員の知識・技能は国際競技会を開催するのに充分なレベルにあると認識していた。まして、オリンピック・パラリンピックのＮＴＯに相応しい人材を推薦してほしいと要望して集まった方々であればなおさらである。懸念であったのは日本国内で適用していない国際ルールに習熟することと英会話による外国選手・ＩＴＯ（国際技術委員）らとのコミュニケーションであった。

２日間みっちりと講習を受け、試験まで実施して帰路についたのも束の間、ＮＴＯの資格試験には面接（口頭試問）というのもあり、こちらは講師が全員を対象にできないということから、インターネットを利用した記述式試験を実施した。全員同一の問題ではなく数問を用意してランダムに当てて解答していただくというものであった。

この講義・試験は追試も含めて、その後３回ほど行った。特にマラソン・競歩の道路競技でＮＴＯの数を増員しても良いというＷＡの了解から、道路競技の専任のＮＴＯおよび合格者のうち、女性が１割しかいなかったことから、男女平等の観点で女性ＮＴＯの増員を目的として実施された。

## クリーンFOPの原則

ＮＴＯの数は前回大会を基準にして230名という数字が組織委員会およびＷＡから提示されていた。私としては国内の日本選手権や国体をイメージしていたため、極端に小さい数字に驚いた。国際競技会では計測業者が入ったり、素人でも操作可能な機器はボランティアが行ったりしているということであった。そのことから風力計測員などは必要ないと思い込んでいたら、OMEGAからボランティアの編成を依頼され、その構成が試技タイマーや風力計測器あるいは光波計測装置、周回記録盤の操作員まで及んでいたのに閉口してしまった。結局、記録に関わる機器の操作、規則を知らなければ誤りを犯す可能性がある機器の操作は審判員の資格を持つ者が行うべきであると考え、ボランティアからＮＴＯへ割り当てを変えることをOMEGAと調整した。

また、リオ大会でもマラソンや競歩では道路の警備は警察や軍が担い、競技者の監察はバイクに乗った役員が巡回して行っていたことを見ていた。日本の競技会運営は経費節約の観点からと言えるのであろうが、何でも公認審判員が行っているという現状が明らかになった。

OMEGAのボランティアの役割についての変更は、ＷＡの提唱する「クリーンＦＯＰの原則」にもマッチして、ＮＴＯを減らすことなく起用することができたので不幸中の幸いであった。クリーンＦＯＰの原則とは、競技エリア（ＦＯＰ＝Field Of Play）にいる競技者や競技運営に関係のないもの（者／物）を極力減らすことである。そのため、審判員は最小限の人数で競技運営に当たるようにと言われていた。また余談であるが、OMEGA、ＯＢＳ、MONDOが敷設した機器のケーブル類も、この原則に従ってマスキングせよと指示が出て、組織委員会職員とＮＴＯの協力を得てMONDOトラックの切れ端や人工芝でセッションごと、競技ごとに覆い尽くしていた。

## 運営はチームワーク

さて、試験に合格して資格を取得したＮＴＯの方々には、実技研修が待っていた。資格を取得しても、実技研修の中で問題があれば本番の大会に委嘱しないということは、実施要項にも謳っていた。これには、審判編成にも問題点があったからに他ならない。

それは何かと言えば、普段、地元で担当している部署と同じ

部署をオリンピック・パラリンピックで担当できるというわけにはいかないということであった。各加盟団体から推薦されて来た方々には、トラック競技ではスターターが多かったり、フィールドでは跳躍審判員が多かったりという偏りがあった。

一応、本人の希望部署も聞いていたが、他部署とのバランスを考慮して公認審判員研修Project Teamの方で本番大会用の審判編成を行った。当然、先に述べたように希望していない部署に回ってもらった方も多かった。日本陸連の公認審判員制度は特定部署の資格を与えるものではないので、基本的にはどの部署もできなければならない。その原則も適用して、未経験の部署に入っていただいた方もいた。そのために実技研修は欠かせないものであったと同時に、チーム作りという視点も大きなウエイトを占めていた。

長期間にわたり、海外から選手を迎え、経験したことのない場面にも当然直面することになる。そのような場合にはチームワークにより知識・経験を総動員して乗り越えることが必要になってくる。このためには仲間としての一体感の醸成が不可欠であった。

58年前の大会では国を挙げてのイベントという位置づけから、事前に全競技役員を集合させての実技研修（訓練）を実施したと記録に残っていた。しかし、今回はそこまで徹底した事前訓練の実施は予算的にも、社会背景的にも不可能であった。必然的にWeb会議システム、あるいはE-mailによる資料送付での研修が主体となり、それを補うための陸連主催大会を利用した部分的な集合研修という形態となった。

2019年10月、ＩＯＣはマラソン・競歩を突如として札幌で行うことを決めた。同年10月にカタールのドーハで行われた世界選手権の状況を見て、危機感を募らせた結果であった。東京での準備がご破算となり、札幌での開催準備をしなければならなくなったため、組織委員会では札幌チームが急遽編成され、準備が行われることとなった。私の方では道路競技のＮＴＯは競技場内の役職も掛け持ちしてもらう意向でいたが、それが叶わず、札幌に行っていただくことになった。

しかし、それでは人数が不足しており、急遽、北海道陸協にお願いして不足する部署の役員を選出していただくことにした。一方でＷＡには、突然の開催地変更でＮＴＯの養成が間に合わないので、日本陸連が選出する人材をＷＡ資格はないがＮＴＯとして認めてほしいと要請し、認めてもらった。北海道陸協選出の30名を加えた約100名のＮＴＯによって、札幌でのマラソン・競歩は実施された。この100名を補ったのは、地元の北海道マラソンを支えていたボランティアの方々であった。

パラリンピックに向けての準備も、日本パラ陸上競技連盟（以後パラ陸連）の協力で、各地でのパラ陸連主催競技会、地域パラ陸連主催競技会における実技研修、さらにWeb会議システムでの競技規則・運営方法の研修を積み重ね、パラ陸上競技の競技規則や運営方法について基礎から応用まで丁寧に研修をしていただいた。このことは大会成功の大きな要因であったと言える。今後、共生社会の実現に向けて本連盟もパラ陸連との連携を深めていくことが望まれる。

このように幾多の講習・試験・研修を経て2020年を迎えたが、ご存じのように新型コロナウイルス感染症のパンデミックに襲われ、大会は１年延期された。その結果として人事異動や家庭の事情、その他さまざまな状況の変化でＮＴＯの辞退者が続出した。結果として競技場内230名の編成は190名あまりで実施せざるを得ず、この状況は競技ボランティアも同様であった。朝から晩まで酷暑の中でも競技運営業務は非常な負担になるということを考慮してシフトを組み、交代で休養をとれるようにしようという試みは不可能になった。

特に競技ボランティアはオリンピックスタジアム、ウォームアップ会場、練習会場（江戸川区陸上競技場、代々木公園陸上競技場）で400名体制を考えていたが、実際には半分の200名ほどで運営せざるを得なかった。そのため献身的にボランティアの域を超えた働きをしてくださった方々に支えられて、何とか乗り切ることができた。１日８時間、５日間活動したら１日の休養というのが原則であるが、８時間以上連続、10日以上連続といったかたちで協力してくださった方々が大勢いらした。感謝の言葉が見つからないほどである。

東京2020大会（オリンピック・パラリンピック）を支えてくださったすべての方々の経験が、今後の日本陸上競技界の発展に貢献していただけることを願って筆を置きたいと思う。





# オリ・パラ監察員として ～2メートル上から見たFOP～

東京陸上競技協会
中村信也 NAKAMURA Shinya

## 1 Introduction はじめに

私は、第32回オリンピック競技大会（東京2020）[以下、オリ] および第18回パラリンピック競技大会［以下、パラ］において、監察員の副主任として任務にあたった。これまでの日本の競技会のトラック競技運営と異なる点など多くの経験を、監察員の仕事をメインに述べたいと思う。

なお、タイトルにある『２メートル上』とは、主任の補佐という立場からＦＯＰの状況を見渡せる位置として、スタンドとＦＯＰ間の渡り階段の上に座っていたからだ。裏の理由は、2021年５月のテストイベントの時に、世界陸上競技連盟［以下、ＷＡ］のTechnical Delegateが監察本部を見て、「テーブルと椅子を出して何をやっているんだ」と言われ、オリ・パラ本番では監察本部の小スペース化のため、私への椅子支給がなかったために階段に座らざるを得なかったというのが真実である。

図１　私のオリ・パラでの定位置

階段のすべり止めシートで擦れてボロボロになったズボン

## 2 Preparation for TOKYO 2020 オリ・パラ本番までの準備にて

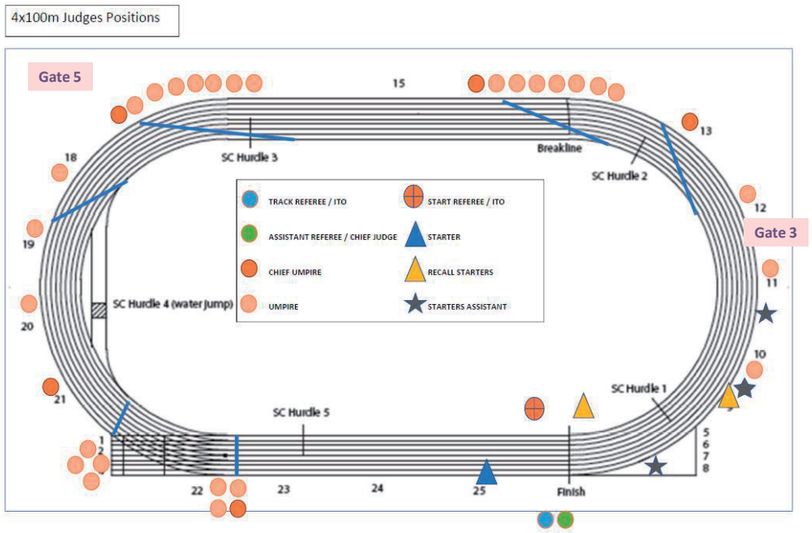
公認審判員資格を取得したのは、大学在学中の新潟であった。新潟では、審判員としてのノウハウを一からを学んだ。その時は、オリ・パラで競技役員をやるということは想像もしなかった。その後、就職で東京に戻り、審判員を続けていた2013年９月。中学生対象の競技会の競技者受付係で、大会本部からの依頼でオリ・パラ招致活動で大量に余った団扇を配布していた中で、東京開催が決定した。その後、2017年４月にＪＴＯとなり、今回の任務担当となった。

2018年から2019年にかけてオリ・パラに向けた実技研修があった。2017年から仕事で海外案件の担当となり、毎月のように海外出張をしている中での研修参加であったため、連続３日間を超える研修には参加できなかった。特に、国際競技会を経験できた2019年世界リレー横浜大会に参加できなかったのは今でも悔しい限りである。

そんな中で2020年には、コロナ禍によってオリ・パラの開催自体が2021年に延期となった。任務委嘱を受けてから本番までの期間中、主任とは立場が異なる副主任として自分は何をやればいいのだろうということを日々、自問自答を繰り返した。2021年５月のテストイベントは、トラック競技の監察活動状況をメモするのみで、あっという間に時間だけが過ぎてしまった。

2021年６月にＷＡのオンライン講習があり、その中にＷＡが作成したトラック競技関係審判員の配置図があった。その監察員の配置内容は、曲走路の日本の標準的な配置人数よりもかなり多くなっていた。配置図のうち4×100mリレーのものを図２

図２　WAから提示された4×100mRのNTO配置案




に示す。その後、近々の世界選手権およびオリンピックの状況をＷＡの公式動画サイトで確認。提示された配置図とほぼ同様の監察員の配置状況であったため、オリ・パラの監査員人数では不足する事態と察した。そのため、私で考えた監察員配置案を作成し、監察員主任にメールで提出の上、オリ本番までに判断をお願いした。

# 3 本番での任務について

## 私の仕事内容

オリ・パラでの監察員副主任としての任務は以下の内容を実施した。

①主任およびトラック担当総務員そしてトラック審判長の補佐

・監察本部にいてＩＰ無線機にて全体進行状況を確認。必要時、主任の代行で通話連絡

・規則違反等の状況発生時、必要に応じてトラック担当総務員および主任がトラック審判長への報告をフォロー

・主任から依頼があった時にその指示に従って行動

②審判員配置表および配置図の作成

・主任による監察員メンバーの配置割り振りを円滑とするために、配置表および配置図を作成し、主任およびトラック担当総務員に事前にメール配信

③監察員連絡票に各レースにおいて準備完了および規則違反の有無を記録

・監察員連絡票（自作）を確認し、監察本部にて各レースの準備完了→スタート時刻記録→規則違反の有無を記録。

④コールルームスケジュールおよびスタートリストをＴＩＣにて受け取り、メンバーへ情報配信

・監察員全員にＳＮＳのグループメッセージにて情報配信。原紙はトラック担当総務員と主任に配布

図３　トラック審判長との意見交換会の様子

・頻繁にＴＩＣへ通うことで、最新情報を提供できるように配慮

⑤監察員メンバーからの問合せへのアドバイス

・監察員メンバーより、ＦＯＰでの活動中の疑問点などに対して、アドバイス

## 本番の中で

常に監察本部にいることでＩＴＯの方々と直接コンタクトする機会があり、動きを知ることができた。ＩＴＯは必要時、ビデオルームへ状況確認する対応もしていた。また、ＩＴＯリーダーおよびTechnical Delegateの指揮の下で動き、フィールド・トラックの分担関係なしにチームとして、リレーでは２～４走の走者のバトンゾーン入れ、長距離種目で周回記録確認をアシストしていた。

オリ・パラの双方につきＩＴＯから、各種目の監察員配置や活動に関してクレームを受けることはなかった。オリでは、ＩＴＯトラック担当と監察員メンバーとの意見交換会を監察員メンバー有志が企画し、トラック競技最終日に実施。少ない時間であったが有意義な時間だった。図３にはその様子を示す。

競技運営はＮＴＯ全員に配布されたＮＴＯsマニュアルに沿って行われた。その中で、トラック競技の監察員の任務で特筆される内容を下記に述べる。

■リレーの対応

日本の競技会では通常、出発係で実施しているバトンパスゾーンへの競技者の誘導、マーカーの配付。4×400mリレーの第３走および第４走へ並び順につき、第３コーナーの通過順の連絡は監査員で実施。

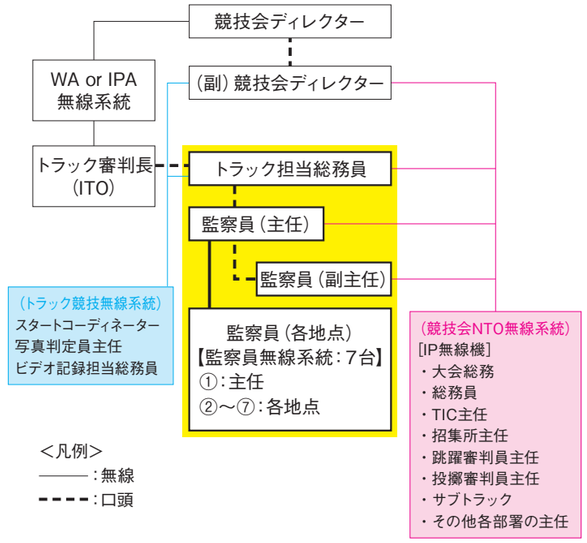
■ハードルの整理

日本の競技会では通常、100ｍＨ、110ｍＨ、400ｍＨのハードルの設置後の管理は用器具係が務め、各ハードルの近傍に待機するが、本大会では監察員が実施。ハードルに破損があった場合は、監察員から用器具係に連絡し、必要に応じて予備のハードルを用器具係が運んで交換する流れだった。100ｍＨおよび110ｍＨのレース間の整理は、速やかな整理が要求されたため、レース監察に配置されていない監察員メンバーをスタート側とフィニッシュ側に整理担当で配置し、レース監察メンバーのハードル整理を補助した。

■トラック競技連絡の体制について

図４にオリ・パラでの連絡体制を示す。監察本部の３人は『競技会ＮＴＯ無線系統』により競技会全体運営状況を把握。トラック競技のみの連絡手段として『トラック競技無線系統』。各地点に配置された監察員と主任間の連絡手段として『監察員無線系統』がそれぞれ構成された。

図４　オリ・パラの連絡体制（トラック競技）




■本大会での監察員の配置

監察員配置の実績を図５にオリ・パラ共通種目、図６にオリのみの種目を示す。この配置はオリ・パラ期間中に監察員メンバーで試行錯誤と協議をしながらまとめた結果である。

ストッパーの配置はなしで、ＷＡからの指示もあり、各種目とも必要最低限の配置となった。なお、パラでは曲走路の監察を増やし、T11、12の種目では、フィニッシュ地点にテザー確認担当を設けた。

図５　オリ・パラ共通種目の監察員配置

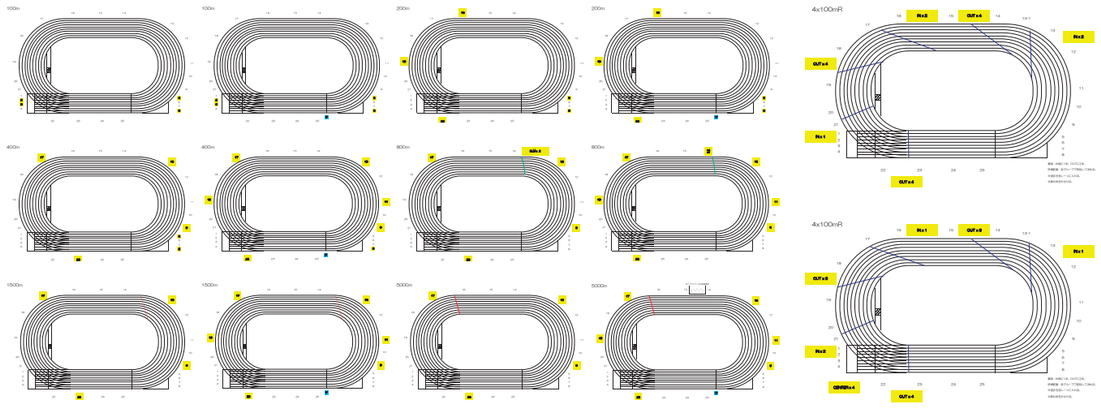
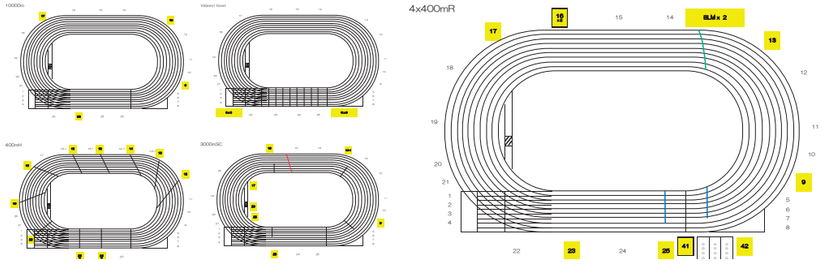


図６　オリのみ種目の監察員配置



# 4 Equipment in track events
# オリ・パラのトラック競技における用器具

■監察員の道具（図７）

黄旗及びブレイクラインマーカー（緑色）は、オリ・パラの用器具公式サプライヤーのMONDOより提供され、監察マーカーと椅子は国立競技場備付のものを使用した。

■3000ｍＳＣの障害物と水濠（図８）

MONDO製が使用された。なお、オリ後、MONDOに返却となったために、現在は日本にない。

■ハードル（図９）

MONDO製のものが使用された。溶接の出来が悪く、ハードル設置に苦戦。結局、バー上部で直線に並べる対応とした。バーは木製であり、スパイクなどが引っかかると塗装やバー自体が簡単に剥げてしまった。交換用のバーも不足し、バーの剥げ具合が小さいものは、白テープで養生された。3000ｍＳＣの障害物同様にハードルもオリンピック後、MONDOに返却となり、現在は日本にない。

■スタート台（図10）

MONDO製のものが使用された。本体下部にキャスターはあったが、機敏な移動が考慮されていない重い構造であったのとキャスターでタータンが痛むので、スタートチームの方々は、搬送台車に載せて移動せざるを得なかった。

■ブレイクラインマーカー（図11）

MONDO製の緑色のものが使用された。ブレイクラインへのマーカー設置位置は、監察員待機所のホワイトボードに図示することで、メンバー間で情報共有を図った。

■4×400ｍリレーの第２・３・４走者の待機所（図12）

2021年５月のテストイベントで、スタート直前にＦＯＰにてＷＡから第２・３・４走者毎に並べるための仕切りを用意するよう指示があった。無論、テストイベント時は用意できなかったので、オリではあらかじめ必要なものを用意しておき、リレー開始前に設置した。

■4×100ｍリレーのマーカー（図13）

各コーナーに白養生テープが配布され、それぞれのコーナー担当で50㎜×400㎜に切って、競技者に配布した。400㎜の長さを確認するために写真のような治具（400㎜に切ったものを折って定規状にしたもの）を作成して、配付を速やかにした。なお、黒のビニール袋は、レース後に取り外したマーカーおよび競技者が持参したペットボトル回収に使用した。

■パラリンピックでのブレイクライン手前のマーカー（図14）

車いす800ｍでは、黄色のテープマーカーを使用。用器具係がブレイクライン手前に貼付をした。

■ビデオルーム（図15）

オリ・パラのすべての競技はビデオルームで常に記録されていた。ビデオルームは制御室と閲覧室に分かれており、制御室では、トラック・フィールドの競技状況が常に映し出されていた。映像は国際放送で使用されているもので、状況確認が必要な時は、速やかに再生、さらにはズームアップなどが制御可能となっていた。閲覧室は、この制御室とは少し離れたところにあり、抗議関係者のみが入室し、映像確認できるのみのスペースであった。

なお、このビデオルームはＴＩＣの直上に配置され、ＴＩＣに来た抗議関係者は、ビデオ確認が必要な場合、すぐにビデオルームに案内された。

**図７　監察員の道具**

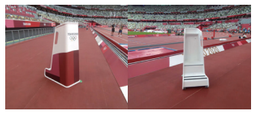
**図８　3000mSCの障害物と水濠**

障害物（高さ調整箇所）　障害物（搬送用台車）　水濠部（高さ調整箇所）　水濠部（全景）

**図９　ハードル**

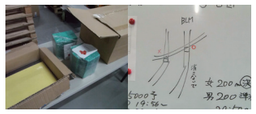
全景　バー補修箇所　高さ表示　位置合わせ

**図10　スタート台**



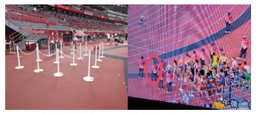
スタート台（前）　スタート台（後）

**図11　ブレイクラインマーカー**



ブレイクラインマーカー現物　置き方の情報共有

**図12　4×400mRの待機所**



設置作業中　競技中（国際放送から。赤丸は私）

**図13　4×100mRのマーカー等（各コーナーへ配付）**

**図14 パラリンピックでのブレイクライン手前のマーカー**

**図15　ビデオルーム**

制御室全景　操作用モニタ　閲覧室全景　閲覧室入口

# 5 まとめ

監察員の配置場所は主任からポイントのみが指示され、実際に監察する詳細位置は各々がそのポイントにあった位置を決めて行った。また、リレーバトンパスの監察ポイントも主任からコーナー割り当てが指示されたのみであり、各々のコーナーに割り当てられたメンバーが協議の上、詳細位置や役割を決めて活動した。オリ・パラの監察員に選抜されたＮＴＯメンバーの多くは、監察員をメインとした審判活動をしていない人である。この監察員の活動が、今後、それぞれが専門とする審判活動に有益になると思っている。

公認審判員資格を取得してから、さまざまな部署を経験してきた。かなり前の話になるが、仕事の出張先で、監察員として委嘱を受けていたとある競技会の前日に突然、ビデオ監察を実施するので翌日から補助員を使ってビデオ撮影してほしいと連絡を受けた時は、出張帰りの新幹線の中で、撮影配置表やポイント説明などを手書きで作成した記憶がある。オリ・パラでは、このような臨機応変に対応する場面が多々あったことも、詳細は割愛するが追記とする。

今後の陸上競技の運営の発展のため、若い公認審判員の方々には、以下を提言したい。

①普段やっている審判部署以外の委嘱を受けた時、または急に委嘱内容が変更になった時は、スキルアップと捉え、柔軟に対応する。そのためにも普段の研鑽に努める。

②大規模な競技会やランクの高い競技会に審判委嘱を受けた時は、他の部署の仕事の様子を確認する。具体的には、サブトラック、用器具倉庫、アナウンサールーム、写真判定室、ビデオルーム、招集所、ＴＩＣなどの設営状況を確認する。

③陸上競技場での競技会では、スタンド上部で競技会を眺める。

これは、公認審判員を取得してから数年後の審判講習会で、日本陸連からの派遣講師が発された内容で、当時、かなり衝撃的な内容だった。スタンド上部では、競技者、観客、競技役員のすべての動きを見ることができ、それによって競技会全体の運営を理解することができる。今でも時間がある時はスタンド上部で競技会を見て、いろいろな気づきを感じている。

最後に、いろいろなスポーツ自体が日々進化している中で、そのスポーツ競技の運営からも学ぶことが多く、それを陸上競技に生かすことが、今後の私の役割の一つではないかと勝手に思っている。人生で経験することがあるかないかの今回のオリ・パラの経験は、絶対に今後の人生の中でいろいろと役に立つ。そして、今回実現できるはずだった密かな私の思いが、いつかは実現できることを願いつつ、これからも陸上競技の公認審判員として活動を続けていきたい。

# オリンピック テクニカル インフォメーションセンター（TIC）

競技運営委員会副委員長
TIC MANAGER
関根春幸 SEKINE Haruyuki

## 1 Preparation for TOKYO 2020
## 開催前準備

コロナ禍で１年延期の決定を受け、2021年７月末から競技場に入っての本格的な準備が始まった。

まず、監督・コーチや選手を含む各国選手団の選手村入村時に配布する資料を準備した。

### 入村時配布資料

①チームリーダーの連絡先一覧、チームリーダーが理解できる言語の把握

大会期間中資料を個別配布するのではなく、メールなどの通信手段を活用して、できるだけ速やかに必要な情報を提供しようとした。また、基本的に英語ですべての情報を発信することとしたが、チームリーダーが理解できる言語を把握しておくことが何かと便利と考えた。

結果的には選手村ＳＩＤとは連携が取れずに、チームリーダーの連絡先一覧を作成することはできなかった。ＷＡから提供された各国の代表者のメールアドレスを頼りに情報交換を行った。さまざまな情報をメールを利用して各国のチームリーダーに配信できた。

入村時配布資料

①チームマニュアル
→ＷＥＢで事前に配信
②監督会議における質問票（監督会議前にＴＩＣにて受け付け、監督会議で回答できるよう技術代表に渡す）
→選手村ＳＩＤで配布。選手村ＳＩＤで提出されたり、競技場ＴＩＣで提出されたりした。最終的には選手村ＳＩＤと連絡を取り質問事項をまとめ、ＴＤに提出した。中には直接ＴＤにメールで質問を送信した国もあったようだ。

質問を受け、ＴＤからの発信というかたちでテクニカルミーティングの内容が２回にわたって各国のチームリーダーに配信された。

(参　照：Tokyo2020 Technical Package for NOCs-Tokyo-26July.pdf ／ Tokyo2020 Technical Package for NOCs-28.7-Tokyo.pdf、図１）

**図１　各国チームリーダーに配信されたテクニカルミーティングの内容**

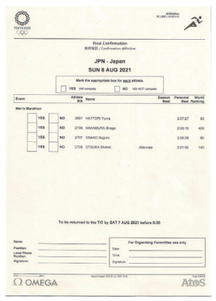



**図２　Final confirmation sheet**

③Final confirmation sheet（最終確認書／図２）
→入村時には配布することができずに、後日、競技場ＴＩＣで配布することになった。回収するのはとても困難だった。チーム自体が入国し入村したのかもなかなか連絡が取れなかった。中には競技の前日にふらっと競技場ＴＩＣに現れて、提出期限などまったく気にせず提出するチームもあった。

また、札幌で競歩やマラソンが行われた関係で、この書類を東京で提出するのか？　札幌で提出するのか？　チームによって判断がばらばらで、欠場するのかどうか最後まで判断できない場面があった。札幌のＴＩＣと連携を取りながら処理を行った。

Final confirmation sheetは見てわかる通り、チームごと競技日ごとに印刷され、各国のチームリーダーに配布される。

このシートを受け取った後に、氏名や記録を確認し、出場する場合はYESにチェックを、欠場する場合にはNOにチェックを付けてＴＩＣに提出期限までに提出する。ＴＩＣではそれを競技日ごとに整理して提出していない国や地域があるかどうかをチェックしてＴＤに渡し、番組編成作業に入る。

コロナ禍の関係で入国が遅れるチームもあり、未提出のシートに関しては参加の意思があるとみなして処理をしていたので、レース直前になって空きレーンができるなど通常では見られない事態も発生した。

④リレーオーダー用紙
→競技開催前に各国チームに配布し、回収することができた。リレーオーダー提出後、そのオーダーをコールルームや競技者係等にぎりぎりまで配布ができずに迷惑をかけた場面もあった。

⑤抗議申立書・上訴申立書
→どんな抗議だったのかをまとめるための用紙を急遽作成し、抗議に備えた。抗議を受け、ビデオ判定室やジュリー秘書に内容を伝え、その後の解決がスムーズに進むように準備をしたが、抗議を上げてくるチームが必死で、なかなか納得しない場面もあり、作業が深夜に及んだこともあった。

⑥アスリートビブス
→選手の氏名の入ったアスリートビブスを配布。配布後、ホテルに忘れた、失くしたなどの理由による再発行に関してもＴＩＣとコールルームで扱った。

⑦監督会議入場用パス（通常は各国代表者１～２名）
→コロナ禍でオンラインミーティングとなった。資料も配布された。

### 事前準備に関して感じたこと

大会開催に向けて意気込んで競技場ＴＩＣを訪れたものの、部屋に入って愕然とした。テストイベントの際と同じ状況のままだった。ボールペン１本も準備されておらず、「○○にあります。準備しています。今持ってきます」という対応だった。

準備作業にも支障が出るので、テストイベントで必要だったものを書き出し、担当者に渡して対応をお願いしたが、実際にはまた同じ結果となった。「○○にあります。準備しています。今持ってきます」という言葉を聞いたかと思えば、次には「今から買ってきます。必要なものは部署ごとに買ってきてください」だった。１年延期は何だったのか？　と思った。それでも気を取り直し、必要なものを買い足したり、知人にお願いして調達したりした。

ＴＩＣには時計もない有様でした。あとでこのことを聞くと「ＴＩＣに時計は必要ですか？」という質問がオリンピック開始直前に出てくるような状況だった。ＴＩＣの仕事内容を説明し、時刻の確認がいかに大事かということを担当者に説明したが、「今からでは買えない」というのが回答だった。

予算があり、それを効果的に使いたいという考えはわかるが、必要なものまで削ってしまうやり方には納得がいかなかった。もう少し計画的に運営できたのではないだろうか。

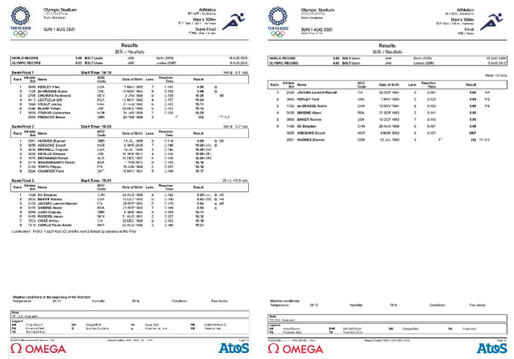
通信手段についても同じことが言える。組織委員会には専用のメールアドレスやスマートフォンなどが配布されているようだったが、ＴＩＣには配布はなく、すべて個人のメールアドレス、個人のスマートフォンを使用しての作業だった。私自身のメールアドレスや個人のスマートフォンの番号もチーム関係者に知らされていたようで、個人的にメールや電話がかかってきて対応する場面もあった。ある程度は仕方ないにしても、オリンピックではどうなのだろう？　と疑問が残った。

## 2 During the competition
## 競技開催中

必要なさまざまな情報を、選手やチーム関係者に伝えている。情報提供として以下のものをＴＩＣの外のホワイトボードに掲示したり、緊急性のあるものに関しては、メールで連絡したりしていた（図３）。

①スタートリスト
②リザルト
③競技時程、招集時刻案内
④気象情報

**図３　スタートリスト（左）とリザルト（右）**



⑤総務や技術代表からの連絡事項から事務諸連絡

スタートリスト、リザルトには掲示した時刻を必ず記入し、抗議の受付時刻の期限をはっきりさせた。どこのＴＩＣでもやることだが、発表時刻を正確に記すことで公平・公正を保っている。

また、スタートリストを必要部署に必要枚数を印刷し、配布する作業も行った。当初は男女別に紙の色を分けるなど、いろいろ工夫をする予定だった。しかし、ＴＩＣに持ち込まれる紙についてもこちらの思い通りにはならず、白い用紙は少なく、カラーの用紙も青・黄・桃と用意されていたが量がまちまちで、こちらの思い通りにはならなかった。サイズもお願いしたものがなく、他部署からもらって来たり、追加してもらったりと大変な思いをした。

また、大量の印刷をするにも関わらず、インクトナーも十分な供給量はなく、インクトナーの不足から印刷作業が止まり配布も止まるという想定外の事態も多々発生した。

競技時程・招集時刻の案内は、Competition DirectorのCHRIS COHEN氏が毎日詳細なものを作成してくれて、それをＴＩＣで印刷し、必要な部署に配布したり、掲示をしたりしていた。

（参照：2020OLYMPIC SCHEDULE 詳細.pdf ／図④）

## 抗議・上訴の受け付け・対応

競技中、一番の大仕事が競技に関する質問、抗議、上訴を受け付けることだった。公式記録発表時刻と受け付け時刻を確認・記録し、抗議・上訴として受付可能かを判断する。と同時に、次の対応に備えて関係部署（総務、審判長、技術代表、必要に応じて写真判定、ビデオ・ルーム等、また上訴の場合はジュリーとも）と連絡を取り、資料を収集する。たとえ口頭による簡単な質問や抗議であっても、その内容を正確に記録しておく。

**図４　東京2020の競技時程・招集時刻**

Athletics　TOKYO 2020

ATHLETICS CALL ROOM SCHEDULE – SESSION 1 – FRIDAY, JULY 30th

| Event | Gender | Round | Heat | Call Room Opens | Call Room Closes | Call Room Bay | Depart Gathering Tent | Arrive Call Room | Call Room Bay | Depart Call Room | Gate Entrance | Arrive at Site | Presentation | EVENT TIME |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種目 | 性別 | ラウンド | 組 | 1ボックス開場 | 2ボックス閉鎖 | コールテント番号 | 3ボックス集合時間 | コール到着時間 | コールテント番号 | コールルーム出発時間 | ゲート番号 | 会場到着時間 | 選手紹介 | 競技時間 |
| High Jump | Men | Qualifying | Group A | 08:07 | **08:12** | A & B | 08:13 | 08:19 | A & B | 08:29 | 3 | 08:33 | 09:13 | **09:15** |
| High Jump | Men | Qualifying | Group B | 08:07 | **08:12** | C & D | 08:13 | 08:19 | C & D | 08:23 | 3 | 08:33 | 09:13 | **09:15** |
| 100m | Women | Preliminary | Heat 1 | 08:29 | **08:34** | E | 08:35 | 08:41 | E | 08:49 | 1 | 08:54 | 08:58 | **09:00** |
| 100m | Women | Preliminary | Heat 2 | 08:36 | **08:41** | F | 08:42 | 08:48 | F | 08:56 | 1 | 09:01 | 09:05 | **09:07** |
| 100m | Women | Preliminary | Heat 3 | 08:43 | **08:48** | G | 08:49 | 08:55 | G | 09:03 | 1 | 09:08 | 09:12 | **09:14** |
| Discus Throw | Men | Qualifying | Group A | 08:47 | **08:52** | A & B | 08:53 | 08:59 | A & B | 09:09 | 4 | 09:13 | 09:43 | **09:45** |
| 3000m Steeplechase | Men | Round 1 | Heat 1 | 08:58 | **09:03** | C & D | 09:04 | 09:10 | C & D | 09:20 | 4 | 09:25 | 09:28 | **09:30** |
| 3000m Steeplechase | Men | Round 1 | Heat 2 | 09:15 | **09:20** | E & F | 09:21 | 09:27 | E & F | 09:37 | 4 | 09:42 | 09:45 | **09:47** |
| 3000m Steeplechase | Men | Round 1 | Heat 3 | 09:32 | **09:37** | A & B | 09:38 | 09:44 | A & B | 09:54 | 4 | 09:59 | 10:02 | **10:04** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 1 | 09:55 | **10:00** | D | 10:01 | 10:07 | D | 10:15 | 1 | 10:20 | 10:23 | **10:25** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 2 | 10:03 | **10:08** | E | 10:09 | 10:15 | E | 10:23 | 1 | 10:28 | 10:31 | **10:33** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 3 | 10:11 | **10:16** | F | 10:17 | 10:23 | F | 10:31 | 1 | 10:36 | 10:39 | **10:41** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 4 | 10:18 | **10:24** | G | 10:25 | 10:31 | G | 10:39 | 1 | 10:44 | 10:47 | **10:49** |
| Discus Throw | Men | Qualifying | Group B | 10:22 | **10:27** | C & D | 10:28 | 10:34 | C & D | 10:44 | 4 | 10:48 | 11:18 | **11:20** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 5 | 10:27 | **10:32** | A | 10:33 | 10:39 | A | 10:47 | 1 | 10:52 | 10:55 | **10:57** |
| 800m | Women | Round 1 | Heat 6 | 10:35 | **10:40** | B | 10:41 | 10:47 | B | 10:55 | 1 | 11:00 | 11:03 | **11:05** |
| 400m Hurdles | Men | Round 1 | Heat 1 | 10:54 | **10:59** | E | 11:00 | 11:06 | E | 11:14 | 1 | 11:19 | 11:23 | **11:25** |
| 400m Hurdles | Men | Round 1 | Heat 2 | 11:02 | **11:07** | F | 11:08 | 11:14 | F | 11:22 | 1 | 11:27 | 11:31 | **11:33** |
| 400m Hurdles | Men | Round 1 | Heat 3 | 11:10 | **11:15** | G | 11:16 | 11:22 | G | 11:30 | 1 | 11:35 | 11:39 | **11:41** |
| 400m Hurdles | Men | Round 1 | Heat 4 | 11:18 | **11:23** | A | 11:24 | 11:30 | A | 11:38 | 1 | 11:43 | 11:47 | **11:49** |
| 400m Hurdles | Men | Round 1 | Heat 5 | 11:26 | **11:31** | B | 11:32 | 11:38 | B | 11:46 | 1 | 11:51 | 11:55 | **11:57** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 1 | 11:44 | **11:49** | C | 11:50 | 11:56 | C | 12:04 | 1 | 12:09 | 12:13 | **12:15** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 2 | 11:52 | **11:57** | D | 11:58 | 12:04 | D | 12:12 | 1 | 12:17 | 12:21 | **12:23** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 3 | 12:00 | **12:05** | E | 12:06 | 12:12 | E | 12:20 | 1 | 12:25 | 12:29 | **12:31** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 4 | 12:08 | **12:13** | F | 12:14 | 12:20 | F | 12:28 | 1 | 12:33 | 12:37 | **12:39** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 5 | 12:16 | **12:21** | G | 12:22 | 12:28 | G | 12:36 | 1 | 12:41 | 12:45 | **12:47** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 6 | 12:24 | **12:29** | H | 12:30 | 12:36 | H | 12:44 | 1 | 12:49 | 12:53 | **12:55** |
| 100m | Women | Round 1 | Heat 7 | 12:32 | **12:37** | B | 12:38 | 12:44 | B | 12:52 | 1 | 12:57 | 13:01 | **13:03** |

通訳がつくこともなく、日本人だけで対応した。すべてがうまくいったとは言えないが、ジュリー秘書のカナダから来たジェインが私たちを励ましてくれたおかげで、疲れていても気持ちよく仕事をすることができた。

競技終了後、抗議→上訴と続き、結論が出るまで時間がかかったときもありました。午前2時まで結論が出ずにチーム関係者がＴＩＣに残ることもあった。そんな時間になってしまうとチーム関係者は選手村に帰る手段がなくなる。また、組織委員会の本部詰めの大半の職員も持ち場を離れており、チーム関係者を選手村に届けるタクシーなどの手配もＴＩＣで行い、苦労した。

そういったことをオリンピック期間中に何回か経験し、選手村への最終バスが出た後に抗議や上訴の結果待ちでチーム関係者が残りそうな時には、大会本部の職員に代替交通機関の調達などをお願いした。しかし、それはチーム負担だと言われ、タクシーの手配など外国の方にはできないため、ＴＩＣで手配をするしかなかった。

オリンピックでの抗議事例をまとめているので参考にしてほしい（図５）。

# 3 After TOKYO 2020
# 大会を終えて

コロナ禍中の大会だったため、選手、チーム関係者、競技役員、スタッフはバブル方式の中で管理されていました。ただし、管理というのは名目だけだった。ＴＩＣ担当のボランティアはほぼ日替わりで、外部から入ってくる。バブルと言いながらも、大きな穴だらけだった。感染症のクラスターが発生しなかったのは幸運だっただけだと考えている。

それでも多くのボランティアを配置し、ＴＩＣ→大会本部への動線を遮断されたり、トイレに行って帰るだけの動きを監視されたりといった状況だった。何のためのバブルだったのか、いまだに理解できない。ＴＩＣにメダリストが集まり、１階のエントランスに降ろして表彰の準備をする時も、メダリストに敬意を払うどころか「バブル」という言葉を使ってまったく無駄で、遠回りな動線を設定してもいた。動線も関係部署が複数あるようで、いろいろな調整が必要だった。部署ごとで縦割りになっていて、選手のことを中心に計画されていなかったことが非常に残念だった。

オリンピックはものすごくハードな10日間だった。ＴＩＣのメンバーが一丸となり、不足するものを知恵と経験でカバーして、無事に大会を終えることができた。このメンバー全員に感謝の意を伝えたい。

■オリンピックTIC担当

井上　博行　浅野　政和　藤村　徳寿
荻野　　歩　清水　　亙　坂本　聡志
宮本　　智　丹羽　智行　小山　正典
橋本　忠志　岩脇　充司　高田　彬成
町田　紀子　黒須　雅弘　淺田　大吾

本当にありがとうございました。また、これ以外にも多くのボランティアの方々にご協力いただき、運営することができたことを報告する。



**図５　東京2020における抗議事例**

| No. | DATE | NOC | EVENT | REASON / DESCRIPTION | Protest | Appeal |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 30-Jul | FRA | M3000mSC Ht.1 | TR17.2 OBSTRUCTION ⇒ DECISION STANDS. NO APPEAL | Yes | No |
| 2 | 30-Jul | AUS | M3000MSC HT. 3 | TR17.4 LANE INFRINGEMENT ⇒ REINSTATE ATHLETE BY video Referee. Athlete steps inside the straight line after water jump. | Yes | No |
| 3 | 30-Jul | GER | W800M HT. 3 | TR17.2 OBSTRUCTION ⇒ DECISION STANDS ⇒ APPEAL DENIED. | Yes | Yes. Appeal denied. |
| 4 | 30-Jul | BDI | W5000m | Claims TR17.2 obstruction ⇒ however, she was DQed for TR17.4. Stepping on the kerb a few times. during the race. Made an appeal but denied. | Yes | Yes. Appeal denied. |
| 5 | 30-Jul | USA | Mx 4×400mR | Claims that athlete was not "properly placed" in the relavant position of the Exchange Zone. Referee decision stands, team appeals. Jury decides that Athlete was not placed properly in position. Appeal Approved. US reinstated. | Yes | Yes. Appeal approved. |
| 6 | 30-Jul | DOM | Mx 4×400mR | TR24.20 Changing position after the team entered the final bend. At the Exchange Zone, athlete was placed outside, despite their team entered the final bend in 2nd position. The Athlete moves to the second position after being guided to her position outside. Athlete DQed. Referee decision stands. Appeal made to jury, the athlete was not correctly positioned by official. DOM reinstated by Jury. | Yes | Yes. Appeal approved. |
| 7 | 30-Jul | FRA | M3000mSC | Protests for being impeded. Referee says this is a normal race incident, results stand. No Appeals. | Yes | No |
| 8 | 31-Jul | JAM | W400mH Heat 4 | Starting block was malfunctioning as it gave problems settling in the grooves. It did not snug in the groove. This impacted her start negatively we request that she be reinstated and advanced to the next round. Result stands. Athlete had much time to set her starting blocks properly. | Yes | No |
| 9 | 31-Jul | GER | Mx 4×400mR | Germany requests to be entered in Lane 9. USA and DOM should remain as DQ. USA and DOM's decision remains but Germany picked up to Lane 9 by Jury. | Yes | Yes. Appeal approved. |
| 10 | 31-Jul | POL/BEL/ ESP/ | Mx 4×400mR | USA baton change outside the zone. Unfair advantage, male runner ran 420 meters and female runners ran 380 meters. DMR cuts in during the exchange. Decision stands. Protests filed late. Appeal is denied. The jury has deliberated at length and considered all of the available evidence including video footage and statements of officials. In light of all of the circumstances, surrounding the exchanges in the 4x400m mixed relay, the jury has determined that a fair approach is to advance the Top 8 teams with valid performances and the USA team to the final. In the absence of any compelling new evidence, this decision stands. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 11 | 30-Jul | BDI | W5000m Ht. 2 | DQ for Lane Infringement. Athlete steps on the kerb. Video shown. Decision stands. Appeal is filed but denied. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 12 | 31-Jul | TTO | M100m SF | Protest: Both athletes 11.00 with different wind speeds. We are requesting that the athlete with the negative wind reading the first, and requesting the revision of placings and/or the inclusion of the athlete in Lane 9. Wind is not a protestable item. The jury reviewed the appeal and notes that the method for breaking ties for last qualifying positions is laid out in Rule 21.5. Wind readings are not considered; rather times to thousandth second are the basis for deciding which athlete advances. The appeal is therefore denied. The jury noted that the matter was raised in the TIC at 20:08 and that considerable time elapsed before it was dealt with. The jury will discuss how to improve the timely responsiveness to protests and appeals by the TIC and others involved in the process. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 13 | 31-Jul | IRL | Mx 4×400mR | USA and DMR reinstated due to official error. Germany advanced also and should be included in last 3 seed. This should be considered on making lane draw. Ireland are disadvantaged as a result. Request: Redraw of lanes. As 6th seed in we expect lane 3 or lane 8. JURY: In the course of making decisions on other appeals of the 4x400 mixed relay, the jury decided that the draws for lanes for the final be based on times and places of teams as recorded in the semifinals. The TDs acted accordingly and in accordance with Rule 20. The appeal is rejected and the start list remains as published. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 14 | 31-Jul | NED | Mx 4×400mR Final | Reviews video. No protest. | No. | No. |
| 15 | 31-Jul | EOR | M800m Heat 3 | Referee's decision stands. Brought up to Jury: James was in good position and was stepped on the foot which made him fall and rank last James wants a chance to race fairly. Requests: Revise the referee decision and allow James to advance. Jury: Jury reviewd the video of the incident and concluded that the EOR athlete contributed to his fall by cutting in at an acute angle and too close to other numbers (notably athlete #1807 ESP). For this reason the Jury rejects the appeal and the result stands as originally published. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 16 | 31-Jul | IRL | M800m Heat 5 | Athlete Mark English in Heat 5 was impeded in early part of the race. We would like to see video. | Sees video. No protest. | No. |
| 17 | 1-Aug | AUS | Men 800m SF3 | Protests for Athlete being "seriously affected" by unintentional obstruction under Rul 17.2.1 by the fall in front of him. Riseley's progress seriously impeded in that he had to take 2 - 3 stutter teps which slowed him alsmot to stop, then had to move laterally to avoid the fall. Results stand due to race incident. Jury reviewed the video footage of the race and the incident in question. While the jury agrees Jeff Riley was affected by the falling/fallen athletes, the jury does not believe the athlete was sufficiently adversely affected to warrant advancement of the final. Appeal denied. | Yes. | Yes. Appeal denied. |
| 18 | 1-Aug | GBR | Men 800m SF2 | Protests for obstruction and requests TR17.21 be applied to advance to the next round. Result stands. | Yes. | No. |
| 19 | 1-Aug | BOT | Men 800m SF3 | Referee decided to qR the Athlete before protest. Another athlete's fall resulted in the fall of this BOT athlete. TR17.2.1 | No. | No. |
| 20 | 1-Aug | USA | Men 800m SF1 | Protests for Impedement. Result stands. | Yes. | No |
| 21 | 1-Aug | AUS | Men 800m SF1 | Protests for obstruction. Result stands. | Yes | No |
| 22 | 1-Aug | ALG | Men 400mH SF3 | Protests for another athlete's fall causes the athlete to sway and "seriously affected". Referee says not seriously affected, result stands. | Yes | No |
| 23 | 1-Aug | IRE | Men 400mH | Claims another athlete's trail leg did not clear hurdle. The video shows otherwise. Referee upholds result. No appeals | Yes | No |
| 24 | 1-Aug | POR | Women SP | Shot measurement looks short. POR coach taken to VDM room to view 4th and 6th round throws. VDM ITO was present. Measurement correct. | Yes | No |
| 25 | 1-Aug | ESP | Women 3000mSC | The athlete was obstructed unintentionally by another athlete laying on the ground who procured the fall of athlete Robles when the group was still compact. Rule 17.2.1 applies. The athlete 1776 is advanced to the final by Ref. Decision. qR. | No. | No |
| 26 | 1-Aug | POR | Women 1500m | Protests for being impeded. She was stopped due to an athlete in the front and requests to advance to the next round. Referee rules that this was a race incident. The jury reviewed video of the race leading up to the incident, the incident and the remainder of the race. the jury concluded that the Portuguese athlete's ability to complete the race successfully was significantly affected by the manner in which the Morroccan athlete left the race, impeding in particular the Portuguese runner. The jury directs that the Portuguese athlete should be advanced to the semifinals. | Yes | Yes. Appeal approved. |
| 27 | 1-Aug | NGR | Women 100mH | Protests for athlete impeded by the athlete in lane 7 who hit a hurdle and in the process hit her arm and thereby throwing her off balance. Results stand. | Yes | No |
| 28 | 2-Aug | KEN | Women 1500m | Protests for athlete being tripped and fall down immediately after the bell at within 400m to go. Referee already decided to qR the athlete before protest. | No | No |
| 29 | 2-Aug | KEN | Men 3000mSC | To ascertain whether the ETH protest affects Kenyan athlete. No DQs. | No | No |
| 30 | 2-Aug | ETH | Men 3000m SC | Claims Kenyan athlete obstructs Ethiopian athlete before the last water jump and requests athlete to be in 3rd position. Referee decision stands. No appeals were filed. | Yes | No |
| 31 | 3-Aug | CZE | Women 200m | See video of CZE athlete stepping on the line. No protest. | No | No |
| 32 | 3-Aug | JOR | Women 400m Heat 2 | Claims breach of 17.3.1 lane infringement not seen. Reviews video and sees the athlete stepping on the line. DQ decision stands. Appeal is done but rejected. Claims that stepping on line did not give athlete advantage however, such advantage is irrelevant in lane infringement. | Yes | Yes. Appeal denied. |
| 33 | 3-Aug | AUS | Men 1500m Heat 2 | Obstruction from POL Lewandowski's fall and Edwards' progress impeded and requests athlete to be advanced to SF. Referee decision stands. Appealed. Several occassions of jostling instigated several athletes with varying impacts on the perpetrators and other athletes. The jury did not observe that the AUS athlete was sufficiently affected to warrant advancement to the next round. | Yes | Yes. Appeal denied. |
| 34 | 3-Aug | POL | Men 1500m Heat 2 | qR17.2.1. Athlete was pulled from another athlete causing the fall. Advance to the final. | No | No |
| 35 | 3-Aug | GBR | Women 400m | Athlete has been disqualified. Video clearly shows athlete steps on the line. Results stand. No further Appeals. | Yes | No |
| 36 | 3-Aug | SWE | W LJ | Claims that AUS athlete steps on plasticine. Video shows not. Jump is valid. | Yes | No |
| 37 | 3-Aug | ESP | Men 1500m Heat 2 | Athlete forced to avoid falling of athletes on two occassions. Athlete affected twice by actions / falls of other athletes. Athlete qR. Track Ref. | No | No |
| 38 | 3-Aug | QAT | Men 1500m Heat 2 | Athlete fell in race and could not continue race. DNF. Requests advancement to SF. Referee decision stands. Action does not comply with rules to be advanced to the SF. | Yes | No |
| 39 | 3-Aug | GBR | Men 5000m Heat 1 | Protests that athlete was pushed aside in the final straight and requests athlete to be advanced to the next round. Referee decision stands. Appeals. Acknowledges jostling but not enough to advance the athlete. Appeal denied. | Yes | Yes. Appeal denied. |
| 40 | 3-Aug | KEN | Men 5000m Heat 1 | Athlete pushed and fell on the final lap and requests to advance athlete to the next round. Decision stands. | Yes | No |
| 41 | 3-Aug | BRN | Men 5000m Heat 2 | Athlete pushed and fell down when he was 4th or 5th position. Advances athlete from BRN. Athlete was impeded due to fall by another athlete which he could not avoid. | No | No |
| 42 | 4-Aug | USA | Women 1500m SF 1 | Claims that McGee was obstructed. Referee decides the athlete was significantly affected and advance athlete to the next round as qR. | No | No |
| 43 | 4-Aug | KEN | Women 1500m SF 1 | Protests that athlete was tripped and requests to be advanced to the next round. Referee deciedes this as race incident, no change in results. Team did not appeal. | Yes | No |
| 44 | 4-Aug | ITA | Women 1500m SF1 | Protests that athlete had to avoid the crash of other athletes and significantly affected/ impeded. No change in results. Appeals, jury reviews video but not enough to award advancement. | | |
| 45 | 4-Aug | GER | Women 15000 SF 1 | Protests athlete was obstructed by the crash of other athletes. Referee rules the results stand. Jury reviews but not affected significantly to justify advancement. Appeal denied. | Yes | No |
| 46 | 4-Aug | JPN | Men 110mH SF3 | Claims impeded by athlete in next lane, by hand. Contact could not be confirmed from video. No protest. | No | No |
| 47 | 4-Aug | AUS | Men DEC LJ | Claims the measurement is short. Video measurement shown. The measurement is correct. No changes in result. | Yes | No |
| 48 | 5-Aug | JAM | Men 110mH Final | Request to see the photo finish. Team claims that Jamaican 3rd place athlete should be 2nd. Sees photo finish, no further protests. | Yes | No |
| 49 | 5-Aug | POL | Men 1500m SF2 | Poland requests to see video with athlete losing his shoe. Athlete, qR to the Final 17.2.1. | No | No |
| 50 | 5-Aug | CHN | Men TJ Final | Requests to see video measurement well after the posting of the final result. (Evening). Consulted with TD if viewing of the measurement possible. However, this request could not be granted as the measurement equipment has been taken down after all of horizontal jump events have finished. Mentioned that, although inconclusive (video measurement no longer available) there could be a possibility of athlete's clothing or body part may have slightly touched early. | After protest time limit | No |
| 51 | 5-Aug | ITA | Women 4×100mR | Italy requests to see video to see the baton exchange for Jamaica and review the contact made by Japan for impedement. No change in results. | Yes | No |
| 52 | 6-Aug | RSA | Men 4×400mR Heat 2 | Sees video, no protest. 3rd leg from RSA tripped from behind by COL | No | No |
| 53 | 6-Aug | KEN | 5000m Final | Requests to see video 1 hour after posting of result. Kenya understood that they cannot protest but wanted to see the video. Video Refree rejects this request. | Yes | No |
| 54 | 6-Aug | SUI | Women 4×100mR | Requests to see lane infringement in W4x100mR Lane 5, second change, runner number 3, inside line. Sees video, no protest. | No | No |
| 55 | 7-Aug | ETH | Women 10000m | Protests the DQ TR17.3.2. Sees video, Video Referee says result stands. No further appeals. | Yes | No |

# 札幌会場の道路競技運営について

東京陸上競技協会競技運営委員長
野末雅文 NOZUE Masafumi

## 1 MGC

Overview of MGC

2017年11月の競技役員（ＮＴＯ）資格取得研修会の結果を受け、私は東京2020オリンピック・パラリンピックについては道路競技担当の総務員ということで活動を開始することになった。「オールジャパン」体制が唱えられていたものの、道路競技については、地元の東京陸協の関わりが必要ということでの人選であったかもしれない。

そこでの最初の目標となったのが、2019年９月に開催が決定していたマラソングランドチャンピオンシップ（以下、ＭＧＣ）の開催と、それに向けての体制づくりであった。ＭＧＣは男女２位までが東京2020のマラソン代表に内定する大会としての位置づけと同時に、東京2020マラソンのリハーサル大会でもあった。スタート・フィニッシュを除いては本番と同じコースに設定されており、ＭＧＣの運営体制が、基本的にはオリンピックの競技運営体制を方向付けることになっていた。

2018年５月31日に東京2020マラソンコースが発表された。その後の最初の課題は、ＭＧＣ、しいては東京2020マラソンの競技役員体制を決めることであった。一般的な日本のマラソン大会では、審判資格を持った競技役員がコース上に立ってコースの監察をする。しかし、オリンピックにおいては前回開催のリオデジャネイロをはじめとして、コース上の人員は必要最低限とされ、配置されるとしてもボランティアのみ。競技役員が配置されることはほとんどない。さらに、オリンピックにおける競技運営の決定権は、あくまで国際競技団体［陸上競技の場合は世界陸連（ＷＡ／2018年当時は国際陸連＝IAAF）］にあり、開催国はその決定に従うことになっていた。

当時のマラソンのスポーツマネージャーと競技役員体制に関し、最初に打合せを持ったのが2018年８月である。それから、９月、11月と組織委員会、日本陸連、東京マラソン財団を含めた協議の中で、競技役員体制の大枠が定まってきた。

その内容は、①スタート･フィニッシュの国立競技場内はトラック＆フィールドのＮＴＯが業務を行う。②コース上に関しては新たにＮＴＯを増員し、コース監察と飲食物供給所の業務を行う。③それ以外のコースの安全確保に関してはボランティアが行うが、その中には審判員資格を持った東京陸協の公認審判員も競技ボランティアとして参画する、の３点である。

この時、コース上のＮＴＯの必要性に関して根拠となったのは、競技規則のうち道路競走のレース管理に関する現在のTR55.9 ～ 55.11と、水・スポンジおよび飲食物供給所に関するTR55.8である。これらの条文を基に、コース上でショートカットが起きる可能性のある直角に曲がる交差点や、競技者が離脱する可能性のあるトイレの設置箇所、そして飲食物の受け取りに関して違反行為の起こる可能性のある飲食物供給所に、ジャッジを下す資格のあるＮＴＯを配置する必要があるとしたのである。

これについては、鈴木一弘スポーツマネージャーのご尽力によって2019年２月にようやくIAAFにも認められ、道路競技におけるＮＴＯの大幅な増員が達成できた。このことは札幌にコースが移った際に、結果として非常に役立つことになる。

その後、2019年４月29日と30日に改めて道路競技担当のＮＴＯ資格取得研修会が開催された。道路競技のＮＴＯに関してもトラック＆フィールドと同様、オールジャパン体制で2020年時に年齢60歳未満という前提が踏襲された。

### MGC本番

2019年５月に道路競技担当のＮＴＯ49名が発表された。東京のコースを基に監察員、飲食物供給所を中心に67名のＮＴＯの増員を想定していたので、予定より若干少なかったものの、このメンバーを加えたかたちでＭＧＣに望むこととなった。

ＭＧＣの競技役員編制に関しては、基本的に日本陸連で行われ、私自身はMeeting Manager（大会総務）として従事することになった。また当初の計画通り、スタート・フィニッシュ及び技術総務系統はトラック＆フィールドのＮＴＯ、コース関係は道路競技のＮＴＯが割り当てられることになった。

ＭＧＣの状況が競技運営サイドに本格的に伝わってきたのは、７月11日の主任会議からである。東京マラソンを運営している東京マラソン財団が中心となって準備は進められており、その概要がこの時に示された。ただ、この時点で競技運営マニュアルは作成されておらず、鈴木スポーツマネージャーからその原案が示されたのは８月１日なってからである。

ここからが私にとっての正念場となった。競技運営マニュアルをチェックし、修正箇所および検討箇所の洗い出しと関係者への確認・修正依頼、そして関係者から送られてくる改訂版の校正の連続である。それに加えて、８月からはＭＧＣに関する会議・説明会が数多く組まれるようになっていた。私としては、出席が義務づけられない会議の説明会でもオブザーバーとして時間の許す限り参加することとした。そこで配付される資料や説明の内容が他の会議（特に競技役員関係）の内容と整合性がとれているかを確認したかったからである。特に、ボランティアへの説明と競技役員（ＭＧＣでは監察員以外のコース審判員は東京陸協の競技役員を委嘱していた）への説明、服務内容に齟齬がないかについては特に注意した。これら会議・説明会の内容・議事を基本にマニュアルを再度チェックし、より良いものができるよう注力をした。

総務・総務員の役割として競技役員に対する会議・説明会を、いかに取り仕切り、いかに参加者に理解してもらい、いかに当日スムーズに業務を遂行してもらうかが、重要であると私は感じている。個人的には、人前で話をするのが苦手な方なので、担当部署の責任者には、事前に説明事項を割り振り、当日は準備した内容を説明してもらうようにしている。ＭＧＣについては、60歳未満等という年齢制限もあり、総務員や監察員主任も、今まで大きな大会では経験のない人を抜擢したが、期待以上の成果を発揮してもらえたのではと考えている。

ＭＧＣ前日のコース管理合同最終ミーティング、ＮＴＯ全体会議を無事終えた。ＮＴＯはもとより、本番を見据えてコースの東京陸協の競技役員も60歳未満ということもあり、この種の普段の会議とは異なる熱気も感じられ、大会当日（９月15日）を迎えることになった。

当日は、オメガ（オリンピックのリハーサルとして計測を担当）の準備したピストルに不具合が生じ、スタート時刻が遅れるといったアクシデントはあったものの、ＮＴＯ及び競技役員サイドでの問題はなかった。天気も良く、大会終了後、競技役員として従事した人の顔は皆晴れ晴れとしており、大きな大会をやり遂げたという充実感にあふれているように感じた。私自身も、このときは本番に向けての手応えを感じたが、まさかこの後に波乱の展開が待ち受けているとは予想できなかった。

## 2 札幌への変更と延期、そして本番へ

Change to Sapporo

東京2020マラソン・競歩の札幌への開催地変更のニュースが届いたのは、ＭＧＣが開催された翌月のことであった。この一報を聞いた時は、まさかと思うと同時に、開催地には決定権がないという「またか」という思い、そして、「せっかくここまできたのに、どうして」というなんとも言えないむなしさを感じた。ＮＴＯ以外の多くの東京陸協の審判員にとって、開催都市であるにもかかわらず、オリンピックの競技運営に直接関われるのは道路競技のみであったため、これではオリンピックが行われても何も残らないという矛盾も感じた。

その後、11月１日に正式に札幌でのオリンピックのマラソン・競歩の開催が決定した。それからは、当然のことながら特に何のアプローチもなく、私個人としては、オリンピックは何か他人事であるかのような気さえしていた。

年が明けて、本来であればオリンピックイヤーである2020年２月、新型コロナウイルス感染症の発生と世界的な感染拡大が起こり、多くの競技会が中止、延期となる中、東京2020についても３月25日に正式に延期が決定された。

通常では絶対にありえないような事態が起きてしまう東京2020。新型コロナウイルスによる延期については、札幌への開催地変更ほどのショックはなかった。むしろ、ここまで予測不能なことがいろいろ起きると、どうにでもなれという気分であった。

### 札幌マラソンフェスティバル

2020年は競技会の中止、延期への対応、そして競技会が開催されるとなれば、感染症対策の立案と、新型コロナウイルス感染症に翻弄された。東京では７月に東京選手権、８月にセイコーゴールデングランプリと、かなり早い段階で競技会を開催したこともあり、具体的な感染対策の面、そしてセイコーゴールデングランプリでは初めて陸上競技で国立競技場を使用するといった部分でも注目を集め、それに対する企画・準備に追われた。

そのような中で、８月４日に東京2020マラソン・競歩のキックオフ会議が陸連事務局で開催された。ここで初めて組織委員会、日本陸連、北海道新聞、北海道陸協との顔合わせと概要の説明が行われた。本番までの濃密な期間をともにすることとなる組織委員会の長澤氏、石田氏、北海道新聞の高野氏、小山氏とは、ここが事実上の初顔合わせであった。

ただ、実際のところこれ以降は、特に情報が提供されることもなく時は過ぎ、12月になって、鈴木スポーツマネージャーより2021年５月５日に札幌でマラソンのテストイベントが行われることが通知された。そして、2021年２月にテストイベント参加の意向調査が行われ、オンラインでの情報共有会が開催されたのは３月９日であった。ここで初めて、テストイベントの札幌マラソンフェスティバルの開催概要と競技役員編制を知ることとなる。

競技役員に関しては、ＭＧＣを経験した各都道府県選出の道路競技担当ＮＴＯに、新たに北海道選出のＮＴＯも加わるかたちとなった。４月16日の事前打ち合わせを経て、22日に２度目の情報共有会が行われ、ここで競技運営概要（マニュアル）が示されるに至った。2020年の６月に、前任の陸連競技運営委員会の岩崎氏が辞退されたための後任として、オリンピックのマラソン・競歩に関して、私はこの時Competition Directorという立場にあった。しかし、札幌にはこの時まで行ったことがなく、土地勘もない上に、札幌に開催が決まってからの状況や経緯もまったくわからない。そのため、競技運営概要に関してのみ確認作業を開始した。

北海道新聞の高野氏は北海道マラソンの開催にも携われていたため、そのノウハウの蓄積があり、マニュアルはわかりやすくレイアウトされていた。そこに、ＭＧＣやその他のマラソンの経験を基にした確認や提案をさせていただき、短い期間の中でご対応いただいた。

2021年５月５日、札幌マラソンフェスティバルは、新型コロナウイルスの感染再拡大が懸念される中で開催された。ハーフマラソンと10kmの部が行われ、ハーフマラソンはオリンピック本番コースの１周目の大きな周回コースを使用するものであり、オリンピック代表選手を含むエリートランナーが参加した。一方、10kmの部は、当初はエリートランナーと市民ランナーの参加で行われる予定であったが、新型コロナの感染拡大に伴い、エリートランナーのみでの実施となった。

新しいコース、新しい体制で望んだテストイベントであり、滞りなく終了はできたものの、実施したことによって本番に向けて数多くの課題が浮き彫りになってきた。

## 本番に向けて

この大会を終えて着手したのは、競技役員体制の再構築であった。

まず、スタート・フィニッシュ周りの競技役員の増員と、役割分担の徹底である。ＭＧＣではトラック＆フィールドのＮＴＯがスタート・フィニッシュ部分を担っており、十分な人数が確保されていた反面、この大会では競技者係、出発係、マーシャル、ＰＥＣ係は兼務となっており、特に招集所での業務や、スタート地点への誘導に支障をきたしていた。また、ウォーミングアップエリアを管理する競技役員も置かれておらず、その対応にもこれらの競技役員が当たっていた。この部分は、通常の市民マラソンでは問題とはならないかもしれないが、エリートランナーのみの大会では結果として、トラック＆フィールドの方式に近づけた方がよかった。

そこで、競技者係とＰＥＣ係は兼務するものの、マーシャルと出発係は独立させた。競技者係はスタート前には招集所での任務に専念し、フィニッシュ後はＰＥＣ係としてミックスゾーンからＰＥＣＲ（ポストイベントコントロールルーム：場所としてはスタート時の招集所）までの管理を行うこととした。そして、マーシャルにはウォーミングアップエリアの管理と、招集所からスタート地点までの誘導、途中棄権者の対応、フィニッシュテープ、フィニッシュからミックスゾーンまでの管理を行ってもらい、出発係とスターターにはフィニッシュ後はメダルハンターもしくは決勝審判業務を兼務してもらうこととした。

スタート・フィニッシュ付近では、女性競技者への対応やテレビカメラに映り込む可能性も高いことから、スタート･フィニッシュに関係する部署では、できる限り男女同数になるよう配慮した。そのようなことで、ＭＧＣやテストイベントではコース上で監察や飲食物供給に携わっていた方のうち、多くの方にスタート・フィニッシュ周りに移っていただくことになった。

また、コース上との無線系統については、コースの設営・撤収の確認、コース上のアクシデントや、エリアスタッフについて連絡するエリア長との連絡と、規則違反を報告する走路監察員（ＮＴＯ）からの情報系統をＭＧＣと同様に分離した（途中棄権者情報についてはどちらからも連絡を受ける）。エリア長との連絡をコース管理担当総務員として北海道陸協の方にお願いし、走路監察員からの情報についてはＭＧＣでも対応した監察員主任の方に競技者管理担当総務員を兼務するかたちで、再度そのポジションで任務を担っていただくこととした。

競歩に関しては、かつての日本記録保持者でもあり、プロパーである組織委員会の石田大介（旧姓：池島）氏に、ほぼお任せであった。JRWJの資格を持つ方は、競歩においてはIRWJの補佐、周回記録、ペナルティーゾーンといった競歩特有の業務に携わることが決まっていたため、マラソンについては主として、周回や飲食物供給所の業務をお願いした。

札幌の道路競技は、８月５日に男子20km競歩（16：30スタート）、８月６日に男子50km競歩（５：30スタート）と女子20km競歩（16：30スタート）を行い、８月７日に女子マラソン（当初は７：00スタート）、８月８日に男子マラソン（７：00スタート）を行う日程となっていた。真夏の暑さの中、特に５日から７日まではタイトなスケジュールが組まれていた。そこで暑い中、長時間立ち続けることになる監察員の方については、20km競歩と50km競歩に従事する人を分ける措置もとった。

長澤氏、石田氏、高野氏、そして北海道陸協の大会総務の方に、これらの提案についてご理解をいただき、競技役員編制が確定するに至った。

５月下旬から７月の大会直前までは、リモートでのＮＴＯのへの情報共有会、主任会議、各分科会とそれに向けての打ち合わせ、そしてマニュアルの確認作業と細部の懸念事項への対応と、オリンピック準備に向けての対応一色となった。特に、私はマニュアルの競技注意事項、ＮＴＯの業務内容に力点をおいて作業を行った。長澤氏、高野氏、石田氏と頻繁なメールのやりとりを行いつつ、確認作業を進めていった。この期間、私でさえかなり時間をとられていたので、組織委員会や高野氏の仕事量はどれほどのものであったか想像がつかない。

そして、７月30日に再度、札幌入りすることになる。

# 3 4Days of TOKYO 2020 オリンピック本番

東京2020に関しては、コロナ禍の中での大会ということで競技役員についても行動規制がかけられた。30日の夜にホテルにチェックインして以降は、業務での乗り物を用いての移動以外の外出は禁止となっている。そのため、徒歩でホテルを出ることはできず、街中を散歩することさえできない。競技会場まで徒歩圏内であるにもかかわらず、タクシーの利用が義務づけられる。朝の食事は、ホテルのビュッフェであるが、昼と夜はホテル自室での弁当という生活であった。

31日は大会会場の視察と、夜にはコース上のレコードライン塗布の立ち会いを行い、１日はマラソンのドレスリハーサルと自動車でのコース確認を行った。札幌といえども、スタート付近の昼間の気温計は33度を示すといった状況である。

３日にほとんどのＮＴＯも札幌入りし、ウエアの配付も行われ、本番モードが高まってくる。４日の午前中は会場の見学、そして、午後からは交通規制を本番並みに拡大して競歩のドレスリハーサルが実施された。ここでの大きな課題は、招集所から選手をスタート地点に向かわせ、スタート地点での整列、有力選手の紹介を行ったうえで、最終的に定時にスタートをさせることである。この一連の流れを翌日に控えた男子20km競歩の予定時刻で行った。それぞれの部分での確認作業も行われたため、当初の予定時刻にはスタートはできなかったが、実際に行ったことで、各部署のＮＴＯも時間的な感覚をつかめてきたようであった。

## 男子20km競歩

８月５日はいよいよ最初の種目、男子20km競歩が16時30分にスタートする。当日の午前中は、会場に来て部署ごとの確認と準備を行う。一旦ホテルに戻って昼食を摂った後、13時30分に再度会場入り。この日の最高気温は33度。照りつける日差しが熱い。

14時頃から、選手村からのバスの到着が始まる。そこで大きな問題が持ち上がる。準備していた「氷」がなくなりそうだという報告が、競技運営本部にもたらされたのである。暑さのせいで、各国の選手団が大量の氷を持っていってしまい、選手村からのバスが2台到着した時点で、用意していた氷がほぼなくなってしまったのだった。至る所から「氷はどうしたのか？」という催促が本部に入り、その対応に追われた。結果、しばらくして対応できる製氷業者が見つかり、遅ればせながら事なきを得た。

そうこうしているうちにスタート時間が迫ってきた。心配していたスタートも無難に行われた。道路競技の運営においては、「定時にスタートさせること」と並んで、スタートした競技者数が、フィニッシュした競技者数と途中棄権した競技者の合計と合致すること、また途中棄権した競技者が確実に収容されているかがポイントとなる。男子20km競歩は、当初のスタートリスト通り57名の参加で行われた（オリンピックという競技会の性格上、会場での突然の欠場ということはなく、全種目にわたってスタートリストの人数でスタートは行われた）。

競歩に関しては、コース管理・競技者管理の総務員２名体制で、エリアと監察員のＮＴＯからの無線、飲食物供給担当総務員が各パーソナル、ゼネラルテーブルからの無線を受けることでコースの状況を把握するかたちをとった。レースが始まって少し立つと、「○○番の選手が止まった」「○○番の選手がうずくまった」「嘔吐をした」「再び歩き出した」等さまざまな情報が飛び込んできた。その都度、競技本部内の別系統で救護や清掃チームと連絡をとり、対応に当たっていた。本人からの申告または救護チームの判断でリタイア確定の連絡が入ると、こちらから一斉無線で発報をし、その内容を記録センターで集計、ＤＮＦとして発表となった。競歩に関しては歩型違反による失格もあるので、その場合は競歩審判員から記録センターに失格者情報が伝えられ、記録センターから本部にその内容が伝達されるという流れで情報が共有された。

競技終了後、ＴＤからは氷の不足、嘔吐への対応ということで指摘はあったものの、最初にしては非常に良い運営であったとの評価をいただいた。この後、19時にバスで会場を出発し、ホテル自室で夕食の弁当と20時15分にリモートでのブリーフィング。そして、すぐに山場の８月６日を迎える。

## 8月6日の男子50km競歩と女子20km競歩

男子50km競歩のスタートは朝５時30分である。ＮＴＯの会場入りはスタート３時間前に設定されており、２時30分会場入りのため、ホテルからのバスは２時15分には出発する。そのため睡眠を含め、休める時間は短い。それに加え、この日の札幌は記録的な暑さとなった。

スタートの５時30分時点のコンディションは気温25度、湿度86%、参加者は59名である。レースが始まると、コース上から無線で前日よりも早い段階から、たくさんの情報がもたらされることになった。「止まりそう」「止まった」「うずくまった」「起き上がれない」「救護が必要」「嘔吐している」。７時30分を過ぎると、対応する３名の総務員の声が、競技運営本部内に常に響き渡る状態となっていた。結果、ＤＮＦ10名、ＤＱ2名、フィニッシュした人数は47名であった。

男子50km競歩については、レース自体も過酷ではあったが、競技終了後にもアクシデントが起きた。札幌で行われる種目に関しては、メダルが授与される表彰式（Medal Ceremony）は東京の国立競技場で行われるものの、レース終了後、入賞者に対し、花束を贈呈するセレモニー（Venue Ceremony）が行われることになっている。メダルハンターには、３位までの入賞者の動向を常に追いつつ、Venue Ceremonyに導くという任務がある。そこに、札幌入りしてから１つのミッションが追加されることになった。

オリンピックのセレモニーにおいては、各チーム（各国）の公式のジャージでの参加が義務づけられている。しかし、選手はフィニッシュ後、ユニフォーム姿でミックスゾーンにおいてインタビュー等を受けている。そのため、この間にチームテントに行って、チーム関係者からその選手のチームジャージをピックアップしてくるという任務である。前日の男子20km競歩においては、２位と３位が日本人選手だったこともあり、その対応はうまくいき、Venue Ceremonyはレース終了後、速やかに行われた。しかし、今回はそうはいかなかった。チームテントに行ってもチーム関係者はいない。やっとチーム関係者を見つけたところ、何と優勝した選手がチームジャージを会場に持参していなかったのである。

チームジャージを着用しない以上、セレモニーは行えない。そこで選手村のホテルまでチーム関係者にチームジャージを取りに行ってもらうことになった。これには本部からアールビーズの前島信氏がアテンドをした。タクシーでの往復であるが、

札幌のメインストリートを交通規制している以上、周辺道路は大渋滞である。なかなか戻って来られず、Venue Ceremonyは予定よりも90分以上遅れて行われた（ちなみに前島氏はこの日、女子20km競歩のスタート前にも、ある外国の選手がチームユニフォームを忘れ、それにも付き添ったため、この日は２度選手村をタクシーで往復することになった）。女子20km競歩のスタートは16時30分のため、午後の会場入りは13時30分である。本来は少しホテルで休養ができるはずであったが、昼食を摂ってのとんぼ返りとなった。

午後に競技運営本部へ戻ってくると、ここで待機していた組織委員会や北海道新聞の方の様子が何となくおかしなように思えた。次に行われるレースに集中するというよりも、何か別の方向に意識がいっているかのようであった。その理由は、電話での応対や話の節々から、少しずつ呑み込めてきた。

不穏な雰囲気の中、女子20km競歩はスタートした。しかし、競技運営本部に長澤氏の姿はない。午前中の状況を経験したせいか、コースとのやりとりも比較的落ち着いているかのように思えた。このレースでは途中、コースからトランスポンダーが落ちているとの連絡が入った。その番号は日本人選手のものであった。記録センターにもその旨を伝え、対応をしてもらった。トランスポンダーが外れると、マットで情報が読み込めないため、途中経過が表示されない。ただ、フィニッシュは写真判定装置で判定しているため問題はない（途中、選手から監察員にトランスポンダーが外れていても大丈夫かの質問もあったようで、それについては問題なしとの回答をしてもらった）。このレースは、前の２レースと比較すると、だいぶ落ち着いていたこともあり、レース終盤に私自身はじめて、ＦＯＰに面した歩道に出向いた。ＶＩＰ席には、国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）のトーマス・バッハ会長、ＷＡのセバスチャン・コー会長、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の橋本聖子会長の姿も見ることができた。

先頭がフィニッシュし、競技運営本部に戻ってしばらくすると、長澤氏より神妙な面持ちで「話があります」と言われた。そして「明日の女子マラソンのスタート時刻が１時間繰り上がり、６時00分とすることが決まりました。」と告げられた。

## スタート時刻の変更と女子マラソン

午後の状況から薄々気がついてはいたが、暑さを避けるためという理由でのスタート時刻の繰り上げである。女子マラソンのスタート時刻は８月７日の７時00分で、札幌での開催が決まった時からすべてのことは動いてきた。選手はもとより、マラソンには非常に多くの人が関わる。影響はボランティア、警備、関連施設、物品、車両、報道等すべてのものに及ぶ。すべてが７時を前提に準備され、連絡も段取りもすべてが終わっている。それをこの前日の、しかもスタート予定の12時間前に決めるなど、あり得ないことが起こり続けてきた東京2020マラソンをまさに象徴する出来事となった。

ＷＡのコー会長がチームテントエリアに各国のチーム代表者を集めて了承を得た後、正式に６時00分スタートが決定した。その後、ＮＴＯ全員を集めて、その内容について長澤氏から説明が行われた。説明と協議の結果、少しでも休養する時間が必要ということで、リモートでのブリーフィングをせず、当初のスケジュールをすべて１時間早めて行うことが決まった。

マラソンでは、監察や飲食物供給所のＮＴＯはコース上の配置先に散らばってしまうため、スタート４時間前にホテルを出発するスケジュールが組まれていた。そのため、当初は午前３時の予定であったが、繰り上げに伴い、午前２時にホテル出発の想定となった。しかし、急な決定のため、車両自体の手配が間に合わず、結果として２時30分～３時00分からの動き出しとなった。競技運営本部に着くと、組織委員会や北海道新聞の方は、すでにそこにいた。徹夜で連絡等の対応にあたっていたとのことである。

女子マラソンでは、スタート時刻の変更以外にも大きなアクシデントがあった。それはスタート前の招集所での出来事である。招集開始はスタート30分前、招集完了はスタート20分前に設定されている。

招集所ではアクレディテーション（ＡＣＲ）での本人確認、ＡＣＲの預かり、ユニフォーム・持ち込み禁止品の確認、トランスポンダーの反応チェックが行われる。招集所内で選手は１列に並んで、これら一連のチェックを受けて、招集所から出てくる。日本人選手は招集所の入口の最後部に並んでいた。しかし、招集完了時刻が過ぎ、他の外国人選手は招集所から出てきているのに、スタート15分前になっても日本人選手は出てこない。そこで、招集所審判長に確認をしたところ、次のようなことが判明した。

日本人選手のアスリートビブスには暑さ対策のため、さまざまな大きさの穴が多数開けられていた。TR5.9の規定から、日本チームはそれを認められると考えていたのに対し、ＴＤとＩＴＯはそれは認められないとしたため、招集所を通過できなくなっていたのである。他の選手はスタート地点への移動を開始してしまい、時間がない。急遽、アスリートビブスの再発行を決定し、ビブス再発行用のプリンターのあるＴＩＣに向かった。

この時、スタート10分前。そこからプリンターでアスリートビブスを発行する。この時のプリンターの速度がいかに遅く思えたことか。ＴＩＣはチームテントエリア内の中でも招集所から最も離れたところにある。１枚印刷するごとに、ＮＴＯが１人ずつそれを持って招集所に走って行く。６枚目を印刷し終えたのがスタート５分前。かろうじて間に合ったという状況であった。東京に帰ってから、テレビの録画でスタート場面を見たが、選手はそのようなことが裏であったことなど微塵も感じさせず、スタート地点に立っていたのが驚きであった。

スタート後、少ししてからコース上から無線が入る。路上にトランスポンダーが落ちているとの連絡であった。ナンバーを確認すると、また日本人選手のものであった。そして記録センターにそのことを告げると、５kmのチェックポイントで、その選手以外にもトランスポンダーに反応がない選手がいるので確認をしてくれとのことであった。その番号を聞くと、またも日本人選手のものであった。この段階では途中棄権者もなく、その選手はテレビ画面で確認できる。こちらもトランスポンダーが外れたようであり、もし路上に落ちていたら回収するようお願いをした。中継を見られた方で、各チェックポイントで日本人選手が通過した際に、画面上で途中順位や記録が出てこなかったのを不思議に思われた方もいるかもしれないが、原因はこのためである。

スタート時刻を早めているとはいえ、６時00分時点の気温は25度である。そして湿度も高い。マラソンからは本部内にメディカルの無線チームも同居し、連携をとるようになっている。コースは大周回を１周と、北海道大学構内を中心とした小周回を２周するコースとなっている。競歩の往復１km、２kmコースとは異なり、走れなくなった選手をいかに早く収容するかも課題である。

しかし、周回コースの上、特に北海道大学の構内の道幅は狭く、構内でレースが進行している限りは、大型のアスリートピックアップバスは入ってはいけない。それでも、救急を要する場合については、救護車両がその中をレースに支障をきたさないよう向かっていかなければならない。自ずと現場を含めた連携が必要になってくる。

40～50分ほどしてくると、コースからの無線が入り出し、本部内は、にわかに騒々しくなってくる。連絡を受ける総務員の声が大きくなる。いろいろな選手の状態がアップデートされて入ってくる。その中には救護要請もある。最終的には88名の出場者に対し、15名の途中棄権者が出た。

女子マラソンにおいては、パーソナルドリンクの取り間違いに関しての抗議があった。国名のＡＢＣ順にパーソナルドリンクが並べられているのだが、そこの国名が表示されているサインの前と後ろでボトルを取り違えた選手がおり、取られた選手のチームから抗議が出た。これについてはＴＩＣとＴＤで対応した。

レース終了後のVenue Ceremonyに向けての入賞者の確保、ジャージのピックアップ、入賞者及びチーム関係者に対する説明、そしてセレモニーの実施という流れについては、回を重ねるたびに洗練されていった。

いろいろなことがありつつも、女子マラソンは無事終了し、怒濤の３日間が過ぎた。あとは翌日の男子マラソンを残すのみである。この日の午後は、ひとときの休息がとれた。

## 男子マラソン

８日の男子マラソンに関しては、スタート時刻の変更もなく（これが当たり前なのだが）、当初の予定通り進んだ。コース上への車両が午前３時00分、会場へのバスが午前３時30分にホテルから出発する。本部のスタッフも、昨日までとは異なり、表情もすっきりとしている。

４時30分にウォームアップエリアがオープン。少しすると選手も徐々に入ってくる。６時30分に招集が開始され、滞りなく終わると、６時50分にスタート地点への誘導開始。スタート地点に整列の後、有力選手の紹介、そして７時00分スタート。一連の流れは完璧だった。

男子マラソンスタート時のコンディションは気温26度、湿度80％。前日とほぼ同じ条件だが、風が強い。組織委員会からエリアに対し、風が強い場合にはシンボルマークの入った幕等を、鉄柵やテーブルが倒れないようにそこから外してもよいとの指示も出た。出場人数は106名。スタート序盤、５kmを過ぎた時点で早くも、選手の異常を知らせる無線が入ってくる。それからの本部は戦闘状況であった。8.9km付近で最初の棄権者が出て、メディカル要請が入ったのを皮切りに、刻一刻と異なるナンバーの選手の状況が矢継ぎ早に入ってくる。「歩き出した」「止まった」「うずくまっている」「動けない」「収容車を待っている」「メディカルを寄越してほしい」。中間地点に行く前に、すでに10名以上の途中棄権者が出る。記録センターからもＤＮＦの照会が入り、そのナンバーを読み上げる。その後も無線からの連絡は途絶えず、新たな選手の情報が次々と入ってくる。担当総務員やスタッフの声が本部内に響き続ける。

男子マラソンに関しては最終的に30名もの棄権者が出た。フィニッシュした競技者の中でも、そのまま医務室に直行するケースも多く（入賞者の中にも医務室から出られない選手がいて、セレモニーの開始も少し遅くなった）、非常に過酷なレースとなった。

Venue Ceremony終了後、会場内にいるＮＴＯに集まっていただき、最後のミーティングを行った。マラソンという性格上、コース上のＮＴＯが集まれなかったのは非常に残念であったが、組織委員会、ＴＤから最後の言葉をいただいた。特にその中でも高野氏のスピーチは印象的だった。

# 4 After TOKYO 2020 オリンピックを終えて

私の役割としては、組織委員会とＮＴＯの橋渡しとして、組織委員会に対して競技運営サイドからの疑問点や検討事項の提示と、それを解決するための提案をする一方、ＮＴＯに対しては、必要な業務の洗い出しをした上で、それぞれの分担ごとの業務を明確にしていくことであったのかと思う。それがどこまでできていたかは、現場のＮＴＯの方の判断によると思う。

ただ、はっきり言えるのは、今回の東京2020道路競技を乗り越えられたのは、各都道府県から集まったＮＴＯの方の能力と意識の高さであった。今まで経験したことのない部署に配属された方も多かったと思うが、積極的にコミュニケーションを取り、事前に業務内容を理解し、現場ではＳＮＳも活用してリアルタイムで情報を共有し、的確に動いていただいた。札幌に入ってからも、新たな業務や見落としていた業務が出て、その都度お願いをすると、快く引き受けていただいたり、忙しくて手の回らない部署があると、時間が空いている部署の方が自発的に動いてくれたりもした。

例を挙げれば、競歩の監察員に関して20kmと50kmでシフトを分けたが、シフトに入っていない人も、率先して追加的な業務や他の部署のサポートを行っていた。今回は特に、スタート時刻の変更をはじめとする予期せぬ変更や、突発的な事態も多かった。それらに対しても事態を冷静に受け入れ、臨機応変な対応をしていただいた。

この間の札幌は、選手にとって過酷な条件であったと同時に、ＮＴＯにとっても過酷なスケジュールとコンディションであった。しかし、厳しい条件下で乗り切ったからこそ、充実感と達成感が得られたのではと思う。

私自身、東京2020道路競技に関わることが決まってから約３年半、山あり谷あり、やり甲斐もあった反面、むなしさ、やるせなさも感じた。しかし、終わってみれば携わって良かったというのが実感である。この思いを共有し、今後につなげられればと感じるところである。